

#### 4) 早良平野の古墳時代

1970年代はじめまで、早良平野を中心とした旧早良郡は、弥生時代以降古墳時代にかけて権力の発達が不十分であり、その阻害原因は自然条件もさることながら、隣接地すなわち有力な権力をもった糸島平野（旧怡土郡、伊都国）と福岡平野（旧那珂郡、奴国）とにはさまれたいわば緩衝地域であったためではないと言われてきた。弥生時代にあつては伊都国の三雲南小路、井原鎚遺構跡、奴国の須玖岡本遺跡のような顕著な首長墓がみられないこと、また古墳時代では前方後円墳がないことがその説の根拠となっていた。

1970年後半から80年代にかけての相次ぐ緊急調査の結果、考古学からみた早良平野の歴史的状況は一変した。弥生時代では吉武遺跡群の発掘調査により、前期末から中期前半にかけて他平野に卓越した階層性をもった首長が存在し（吉武高木）、平野や盆地を単位に「国」が成立すると考えられている中期後半には伊都国や奴国「王」には及ばないにしろ早良平野を統括したであろう首長一族の墓が築造されている（樋渡墳丘墓）。平野部では前期初頭から果敢な生産活動が行われており、また朝鮮半島と深い関係などを基礎に、他平野の「国」と遜色のない権力が発生、発展したものと考えられる。

古墳時代では神松寺古墳、柏原A2号墳、拝塚古墳、梅林古墳の4基が、発掘調査により前方後円墳であることが判明した。また前方後円墳（京ノ隈）、帆立貝式古墳（樋渡古墳）も調査され、さらに三角縁神獣鏡を副葬した方形周溝墓（藤崎6号墓）も発掘されるにいたった。これらの古墳に加え、すでに知られていた有力墳を地区ごとにまとめたものが第2表である。これらの古墳から早良平野の古墳時代の首長墓の系譜を探り、梅林古墳の位置付けを考えてみたい。

発生期から4世紀代の前方後円墳は現在のところ早良平野では知られていない。有力な古墳、墳墓として五島山古墳、藤崎方形周溝墓、京ノ隈古墳が、海岸部あるいは海岸に近い丘陵上に築かれている。これらは早良平野のなかで、室見川左岸、右岸、樋井川流域の3小地域の首長、首長階層の墓と考えられる<sup>10)</sup>。五島山は丘陵上に箱式石棺を主体部にもつ数基の古墳からなり、その最北端にある1基から2面の斜縁二神二獣鏡をはじめとした副葬品<sup>11)</sup>が出土した。藤崎は方形周溝墓というこの時期初めて北部九州に採用された墓の形態をとる。十数基が群集、そのうち5基から鏡の出土をみた。2面は三角縁神獣鏡で、その一面は箱式石棺、他の一面は組合せ式木棺の副葬品である。五島山、藤崎がいわば集団墓地（群集墳）をなしているのに対し、京ノ隈古墳は前方後円墳という東方からの墓制を探り、独立して築造されている。しかし後方部主体部（割竹形木棺）からの副葬品は鏡を欠いており、先の2墓地に比べ祭祀権の劣ったものと云わざるを得ない。いずれにしろこれらの古墳、墳墓が、平野北部の海岸地帯に造られていることは、海上交通に対する示威の表れとみてよい。時期が明確なのは藤崎（4世紀前半から中頃）だけで断定はできないが、3地域の首長がこの時期並立していた可能性を求めてもよい。

であろう。副葬品と墓地の継続性からすると、3地域の首長が並立しながらも、藤崎に代表される室見川右岸地域が首位に立っていたとも考えられる。また反面福岡、糸島平野にみられる前方後円墳がないことは自立性の弱い証ともいえる。

室見川右岸地域が他の2地域に比べ優位性をもっていたことは、5世紀前後、全長75mの前方後円墳である拝塚古墳がこの地域に築造されたことでも、その一端を窺うことができる。この規模の古墳は同時期の糸島平野の鋤崎古墳（全長62m）、丸隈山古墳（全長84.6m）、福岡平野の老司古墳（全長75m）と比べても遜色のないものであり、ここにまさに自立した平野を統括する首長が誕生したといえよう。主体部は残存していなかったが、割石の出土および時期的な観点からすれば初期横穴式石室としてよいであろう。初期横穴式石室の成立には朝鮮半島の不断の交渉が前提であり、拝塚の被葬者もこの石室を初めて採用した福岡、糸島の首長層と同等の外交権を持つに至っていたものと考えられる。拝塚にやや遅れる時期、室見川左岸でも樋渡古墳が造営されている。これは弥生時代の樋渡墳丘墓を利用して帆立貝式古墳にしたもので、周溝は甕棺墓に影響を与えないよう掘られている。この古墳も主体部をすでに失っていたが、割石などの存在から初期横穴式石室であったことが想定される。この古墳の周囲では4世紀から6世紀に至る大集落跡が発見されている。また陶質土器、初期須恵器などの出土が多く、朝鮮半島との関係が根強くあったことを窺わせる。樋井川流域ではこの時期の有力墳は確認されていない。

拝塚古墳の次に出現するのが今回調査した梅林古墳である。前項で述べたように出土土器からみると5世紀後半の築造と考えられ、拝塚の築造時期とは大きな隔りがある。拝塚は周溝出土の時期から5世紀中頃まで追葬が行われたとされ、あるいは前方部に後出する主体部をもった可能性もある。とすればそれから梅林古墳に首長墓の系譜を直接的に辿ることができるかもしれない。しかし同じ前方後円墳とはいえその規模には格段の差があることは否定できない。

6世紀に入った頃から室見川左岸では山麓部に古墳が営まれるようになる。6世紀中頃以降は築造の度合いが進み、結果的には400基以上の群集墳の分布となって現れている。7世紀前後には乙石1・2号墳（夫婦塚）という径30mの規模と巨石、巨石室をもった古墳が出現しているが、この古墳に先行する有力墳の系譜は辿りえない。右岸でも2章で述べたように同様の群集墳が西油山周辺に造築される。しかし時期的には6世紀中頃と遅れ、それ以前のものは丘陵部に散在している感がある。梅林古墳に継ぐ有力墳は確認されていない。これに対し樋井川流域では、東油山に群集墳が造営される6世紀中頃から後半の時期に神松寺古墳、柏原A2号墳の2基の小型の前方後円墳が築造されている。時期的には神松寺古墳を梅林古墳の系譜を引いたものと考えてもよいが、立地、規模からして樋井川流域という地域内での首長の系譜を考えた方がよいであろう。群集墳形成の背景のひとつには博多湾周辺の高品位な砂鉄と、半島からの渡来技術者集団を媒介にした鉄生産があげられている。

| 地域    | 墳墓名                | 墳形   | 全長(径)   | 主体部   | 出土遺物                              | 備考                | 文献 |
|-------|--------------------|------|---------|-------|-----------------------------------|-------------------|----|
| 室見川左岸 | 五島山                | 円?   | 不明      | 箱式石棺  | 斜縁二神二獣鏡2、刀、銅鏃9、勾玉2、管玉2            | 周辺に箱式石棺あり         | 1  |
|       | 樋渡                 | 帆立貝  | 約40m    | 不明    |                                   | 段築、葺石、埴輪、周溝(陸橋あり) | 2  |
|       | 乙石H1号墳<br>(夫婦塚1号墳) | 円    | 径20m以上  | 横穴式石室 | 五鈴鏡、刀、鉄鏃、刀子、鎌、馬具、棺金具、耳環、須恵器、土師器   |                   | 3  |
|       | 乙石H2号墳<br>(夫婦塚2号墳) | 円    | 径30m以上  | 横穴式石室 | 刀、鉄鏃、鉄斧、留金具、飾金具、鎌、鉸具、須恵器、土師器      |                   |    |
| 室見川右岸 | 藤崎A1号墳             | 不明   | 不明      | 箱式石棺  | 三角縁盤龍鏡、素環頭大刀                      |                   | 4  |
|       | 藤崎A2号墳             | 不明   | 不明      | 箱式石棺  | 方格渦文鏡                             | 周囲に石棺             | 5  |
|       | 藤崎6号墓              | 方形周溝 | 一辺22.5m | 組合木棺  | 三角縁二神二車馬鏡、素環頭大刀、鉄鏃、鉈、刀子、土師器       |                   | 6  |
|       | 藤崎7号墓              | 方形周溝 | 一辺20.8m | 木棺    | 珠文鏡、刀子、土師器                        |                   |    |
|       | 藤崎10号墓             | 方形周溝 | 一辺12.5m | 木棺    | 変形文鏡、管玉                           |                   |    |
|       | 干隈A3号墳<br>(干隈古墳)   | 円    | 径24m    | 箱式石棺  | 管玉2、ガラス玉8、土師器                     |                   | 7  |
|       | 拝塚(灰塚)             | 前方後円 | 75m     | 不明    |                                   | 段築、葺石、埴輪、周溝(陸橋あり) | 8  |
|       | 梅林                 | 前方後円 | 約27m    | 横穴式石室 | 鉄鏃、刀子、斧、鉈、馬具、管玉、ガラス玉、須恵器、土師器      | 2段築成              | 9  |
| 樋井川流域 | 七隈6号墳              | 円    | 径22m    | 横穴式石室 |                                   |                   | 10 |
|       | 京ノ隈                | 前方後方 | 約40m    | 割竹形木棺 | 剣、鉈、鋤先                            | 葺石?前方部にも主体部?      | 11 |
|       | 神松寺御陵              | 前方後円 | 約20m    | 横穴式石室 | 刀、鉄鏃、刀子、馬具、耳環、勾玉、丸玉、小玉、須恵器        |                   | 12 |
|       | 柏原A2号墳             | 前方後円 | 約20~30m | 横穴式石室 | 刀、鉄鏃、弓金具、U字形鋤先、鍬先、斧、刀子、馬具、須恵器、土師器 | 段築                | 13 |

第2表 早良平野の主な古墳

表文献

1. 亀井明徳「福岡市五島山古墳と発見遺物の考察」九州考古学38 1970
2. 下村智・横山邦継「福岡県樋渡遺跡」日本考古学年報36 (1983年度版)
3. 塩屋勝利『四箇周辺遺跡調査報告書(3) 夫婦塚古墳』福岡市埋蔵文化財調査報告書第51集 1980
4. 島田寅次郎「藤崎の石棺」福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書第一輯 1925
5. 中山平次郎「古支那鏡鑑沿革(二)」考古学雑誌第9巻第3号 1918
6. 濱石哲也・池崎譲二「藤崎遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第80集 1982
7. 井澤洋一『干隈遺跡』干隈遺跡調査会 1985
8. 井澤洋一他(編)『入部Ⅰ』福岡市埋蔵文化財調査報告書第235集 1990
9. 本報告
10. 塩屋勝利他(編)『鳥越・七隈古墳群』福岡市埋蔵文化財調査報告書第124集 1985
11. 山崎純男『京ノ隈遺跡』段谷地所開発株式会社 1976
12. 山崎純男(編)『神松寺遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第45集 1978
13. 山崎純男『柏原遺跡群Ⅱ』福岡市埋蔵文化財調査報告書第125集 1986

以上、早良平野の古墳時代の首長墓の動きを素描してきたが、小地域を基盤とした首長存在が認められる。5世紀前後には福岡、糸島平野と遜色のない首長の存在が拝塚古墳から明かである。しかしその系譜を引くと考えられる梅林古墳は首長墓としても、その権力の縮小、後退は否めない。以後平野を統括する首長墓は見あたらない。磐井の乱以後、早良平野が中央勢力の進出拠点になったことによるものであろうか。外部要因もさることながら、先の3地域の拮抗関係が古墳時代の早良平野の首長層の析出に大きく関与しているものと考えられる。早良平野には他に松浦殿塚、筑紫殿塚など未調査の古墳があり、今後新たに首長墓が発見されない確証もない。また集落、生産址の調査を通して首長層の実態に迫ることも必要であると考えられる。(濱石)

註)

1. 那珂川町教育委員会『井河古墳群－筑紫郡那珂川町大字片繩所在古墳群の調査報告書－』1983
2. 佐田茂(編)『箱池古墳－福岡市南区屋形原所在古墳の発掘調査報告－』1983
3. 福岡県教育委員会『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告 X－粕屋郡須恵町所在遺跡群の調査』1977
4. 須恵町教育委員会『乙植木古墳群II－福岡県粕屋郡須恵町大字植木所在遺跡の調査－』須恵町文化財調査報告書第2集 1986
5. 柳沢一男「竪穴系横口式石室再考－初期横穴式石室の系譜－」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集 上巻』1982
6. 福岡市教育委員会『重留遺跡－重留古墳群C－2号墳・重留古窯址の調査－』福岡市埋蔵文化財調査報告書第178集 1988
7. 甘木市教育委員会『池の上墳墓群』甘木市文化財調査報告第5集 1979  
甘木市教育委員会『古寺墳墓群』甘木市文化財調査報告第14集 1982 他  
これらの墳墓の被葬者は朝鮮半島に関係の深い人々が考えられている。
8. 註4と同じ
9. 渡辺正気・松岡史『福岡県京都郡番塚前方後円墳』日本考古学協会第24回総会研究発表要旨1959
10. さらにこの各々の地域の中に、後の郷単位くらいの地域をまとめた有力者の存在がうかがわれる。
11. 第2表中のA1号墳、A2号墳は仮称。ともに方形周溝墓の主体部ではないかと考えている。